The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

『摩訶止観』病患境
――「病」と「疾」――

渡　邊　幸　江

問題の所在

「病」と「疾」は，今日，「疾病」という一語にまとめられ，病全般を意味する．『摩訶止観』病患境は『維摩経』[1]「問疾品」を典拠とし，菩薩はすべて「有疾菩薩」である．それではなぜ「病患境」という境名も，智顗は「疾患境」としないのだろうか．また，「有疾菩薩」と「有病菩薩」はどのように異なるのだろうか．本論は，智顗における「病」と「疾」の概念に検討を試みる．

1．智顗の菩薩観

大乗仏教における「菩薩」は，悟りへ赴く為に修行する者すべてを指す．だが，智顗は二乗や仏に明確な相違を示し，病患境の冒頭に利根の者には敢えて論ぜず，未だ理解の及ばない凡夫にこの病患境を説くと述べている[2]．また，『摩訶止観』巻一「発大心」には次の説示がある．

> 問．行者自発心他教発心．答．自他共離皆不可．但是感応道交而論発心耳．如子墮水火．父母騒擾救之．浄名云．其子得病父母亦病．大経云．父母於病子心則偏重．動法性山入生死海．故有病行嬰兒行．是名感応発心也[3]．

上記における智顗の主眼は，修行者の初心決定にある．智顗は自力か他力かという菩提心発現の依拠を求めているのである．その答えは，「自・他・共・離の何れもが菩提心を発する事はできず，ただ行者の機感と仏の応用という，相互における感応道交のみが発する事ができる」であり，『維摩経』を引き，父母の病がその子の病に応じ，聊かの間もなく発病する様を感応の発心と名付け，その父母の切なる思い，感応の発心こそ菩薩の大悲心に他ならないとする．また，『涅槃経』[4]「嬰兒品」から，如来は嬰兒に相応し化導し，父母の方便は嬰兒の諸行を見据えた化導であると述べる．つまり，如来が方便に托した常楽我浄の化導と，智顗の大悲による衆生化導はその義において同等であり，智顗における「菩薩」は大悲

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

による下化衆生を目的にした実践者を「菩薩」と捉えることができる．

2．「病」・「疾」

病	検索数	疾	検索数
有病…（…は云々）	1286	有疾…	594
有病.	263	有疾.	175
有病者…	153	有疾者…	21
有病者.	62	有疾者.	6
有病菩薩…	5	有疾菩薩…	68
有病菩薩.	2	有疾菩薩.	12

上記は大蔵経による検索結果である．これを見ると「有病」＞「有疾」の検索数が，「菩薩」の語を加えると逆転している．ただ，この検索は大蔵経全体（経典や論疏）を一括にした結果であり，文章の切り方から数が異なることも想像される．この点は今後の研究において考慮されなければならない．

②「病」の概念

大蔵経には761の「病者.」が検出された．

①病者．謂頭痛眼痛耳痛鼻痛面痛脣痛歯痛舌痛慳痛咽痛．風喘咳嗽喝吐喉啤癲癇癰瘻．経溢赤膽壮熱枯槁痔寤祚利若有如是比余種種病．『中阿含経』[5]

（面（顔面）痛．慳痛（声が鳥のようになる）．吐（吐は実際に物を吐出する）．癰（皮膚に発症する化膿性湿疹）．瘻（リンパ腫）．経（経絡）に溢赤（熱邪が溢れる）．壮熱枯槁（非常な高熱により水分がない状態）．

②応皆能療治．善男子．十方衆生諸有病者．『大方広仏華厳経』[6]

③以為其主．俱有病者．飢渇寒熱．苦楽憂喜而為其主．『大方広仏華厳経』[7]

④我等大師．猶尚有病．況我等身如艸芥能不病耶．『大智度論』[8]

⑤行者安心修道．或四大有病．『修習止観坐禅法要』[9]

⑥第四次明治病方法．行者既安心修道．或本四大有病．因今用心．『釈禅波羅蜜次第法門』[10]

①からは，「病」とは頭痛から痔に至るまでの四大に関する種々飢渇寒熱，苦楽憂喜という状態，②以下からは対象が衆生や行者であることが知られた．試みに『法華経』の長者窮子から「長者有病」を検索すると，この語は『根本説一切有部毘奈耶薬事』から一か所検出され，長者の患苦は性格が暴力化するほど厳しいものであった．つまり，「病」は衆生を対象にした四大の病を指すのである．

長者有病．寝臥床席．由其患苦．性多暴急．悪罵親眷．是以妻子並棄而去[11]．

③「疾」の概念

次に「長者有病」を「長者有疾」とした検索は13箇所[12]，すべて『法華経』

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

を典拠とした．下記『法華経』の「長者有疾」には，前述した「長者有病」における頭痛等の患苦，四大の種々の苦悩は記されていない．

爾時長者有疾．自知将死不久．語窮子言．我今多有金銀珍宝倉庫盈溢．其中多少所応取与．汝悉知之．我心如是当体此意[13]．

ところで『維摩経略疏』に，智顗は「疾体相」を述べている[14]．

疾体相．所以問者．既言法身衆患永断．因於大悲現斯疾者．悲即疾体．（中略）同体大悲無縁無念豈有可見．如磁石吸鉄．如凡夫身患尚無相貌．況法身無縁而有可見．故答言我病無形不可見．

ここには，「疾体相」は法身，衆患永断であり，大悲より「疾」は現れ，その菩薩の「悲」は即「疾体」である．つまり，「疾」と「大悲」は相即の関係を持ち，「病」に見る四大の種々の苦の記載は見られない．大悲そのものが「疾」という菩薩観である．したがって，智顗は菩薩の大悲より生起するものは「病」ではなく「疾」と捉えていると推察する．また，「因於大悲現斯病者」は検出されない．

3．「有病」と「有疾」の菩薩

前述のように「有病」，「有疾」に「菩薩」の語が加わると，検索数は逆転する．

①「有疾菩薩」

「有疾菩薩」は，『維摩経』「問疾品」に見る文殊と維摩居士の問答を基とする．経典では『維摩詰経』（支謙訳），『維摩詰所説経』（問疾品）（鳩摩羅什訳），『説無垢称経』（玄奘訳），論疏では『大方広仏華厳経随疏演義鈔』（澄観述），『注維摩詰経』（僧肇撰），『維摩義記』（慧遠撰），『維摩経玄疏』（智顗撰），『維摩経略疏』（問疾品）（観衆生品）（仏道品）（不二品），（湛然略），『維摩経義疏』（吉蔵撰），『説無垢称経疏』（基撰），『百論疏』（吉蔵撰），『摩訶止観』（病患境），（智顗説，灌頂記）から検索された．

そして，『摩訶止観』には「有疾菩薩」の調伏する対象は「其の心」であり，下記『維摩経』に見る念の生起を指している．

彼有疾菩薩応復作是念．如我此病非真非有．衆生病亦非真非有[15]．

その念とは，私病と衆生病が同じく「非真非有」であると，維摩が我と衆生を同一に見る念をいう．つまり，「有疾菩薩」の念は病苦の様相を越えた念と考えられるのである．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

②「有病菩薩」

1	維摩経義記	1776	T38, p.472b25	云何菩薩調伏心下．就種性上実病之人明調伏法．彼自知法不須他慰．能自調故．前中先問．云何慰喩有病菩薩．問曰文殊今来問病．慰喩之儀応当自出．問曰文殊今来問病．慰喩之儀応当自出．何故請問維摩慰法．釈言．文殊今来問者問維摩病．前具問竟．不問維摩所化者疾．
2	維摩経義記	1776	T38, p.474c15	爾時文殊師利問文殊是為有病菩薩調伏其心．
3	維摩経義疏	1781	T38, p.957b20	但衆生病．従四大起．菩薩病．従衆生起．非実四大違反而生．爾時文殊師利問維摩詰言菩薩応云何慰喩有病菩薩．此第二明衆生病．即是始行菩薩也．
4	維摩経義疏	1781	T38, p.958a27	当作医王．療治一切身心疾也．菩薩応如是慰諭有疾菩薩令其歓喜．総結之也文殊師利言居士有病菩薩云何調伏其心．

「有病菩薩」は『維摩経』を典拠とする．しかし，その『維摩経』に「有病菩薩」は見られない．『維摩経義記』と『維摩経義疏』においても，上記箇所のみに「有病菩薩」は現れる．また，上記表には「有疾菩薩」に見る「調伏其心」の語が見られることからも，上記「有病菩薩」は大蔵経の誤謬である可能性を想像する．

4．考察

「病」は，衆生を対象にした四大に関わる辛苦の状態であり，「疾」は菩薩の大悲による念を指した．また，大蔵経検索は，「病」＞「疾」の結果となり，「菩薩」を合すると，「有病菩薩」＜「有疾菩薩」となった．その「有病菩薩」は衆生の実病を対象とし，「有疾菩薩」は念に重きが置かれ「其の心」を調伏し身が対象ではなかった．そして，『維摩経』に「有病菩薩」の記載はなく，『維摩経義疏』・『維摩経義記』は他の箇所では「有疾菩薩」を用いることから，「有病菩薩」の記載に疑問を呈した．

このような検討から，智顗は『維摩経』に見る「法は不可思議であるがその不説の法を説かしめるのが菩薩の大悲心」から，その大悲心を自らの教導の大本と捉えながらも，現実に辛苦する衆生に立脚し不説の法を説く姿勢を貫こうと考え，境題に「病」を冠し「疾患境」とすることを避けたのではないかと想像された．だが，この考察はさらに『維摩経』の「病」と「疾」を検証することが重要と考

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

える．

最後に，印仏発表時に駒澤大学出身，林鳴宇氏より写本による検討という御助言を賜わった．ここに篤く感謝を表したい．

1）『維摩経』は智顗の最晩年の説示に『維摩経玄疏』があり，関心の高さを示す経典である．ただ，この『維摩経玄疏』における『維摩経』は，観を中心とし不可思議解脱に沿った講説である．一方，病患境は菩薩の大慈悲が強調される．つまり，病患境では『維摩経』の不可思議な宗教的体験を超えた心境ではなく，実相に喘ぐ衆生を対象とした菩薩観が強調されるのである．

2）上智利根解前安忍．則於病境通達不労重論．為不解者今更分別．（大正蔵 46，p.106b）

3）大正蔵 46，p.4c．また，星宮智光「天台止観における発菩提心の大乗的特徴」（『村中祐生先生古稀記念論文集，大乗仏教思想の研究』村中祐生先生古稀記念論文集刊行会，2005 年，山喜房仏書林）p.42 参照のこと．

4）大正蔵 12，p.485b.

5）『中阿含経』大正蔵 1，p.467c.

6）『大方広仏華厳経』大正蔵 9，p.707c.

7）『大方広仏華厳経』大正蔵 10，p.711a.

8）『大智度論』大正蔵 25，p.122b.

9）『修習止観坐禅法要』大正蔵 46，p.471b.

10）『釈禅波羅蜜次第法門』大正蔵 46，p.505b.

11）大正蔵 24，p.7c.

12）『妙法蓮華経』を典拠とする経論は次の通りである．『添品妙法蓮華経』（大正蔵 9，p.150a）．『法華経義記』（大正蔵 33，p.633b）「第六爾時長者有疾自知将死不久竟下劣之心亦未能捨名為付財物譬．是則不領上開三顕一之意．此遠領昔日大品座席之時仏命須菩提為諸菩薩転教説波若之意也」．ここで光宅寺雲法は，「付財物譬．是則不領上開三顕一之意」と述べ，長者が財物を付与する譬えは三顕一の意であることを記している．また同 p.639b14，p.639b27 にも「長者有疾」の記載があり，患苦に関する記載は見られない．『妙法蓮華経玄義』（大正蔵 33，p.808c）「是時長者有疾．自知将死不久．語窮子言．我今多有銀珍宝倉庫．盈溢其中．多少所応取与．窮子受勅領知衆物．而無悕取一餐之意．然其所止故在本処．此領何義．従方等後次説般若．般若観慧即是家業．歴於名色乃至種智即是衆物．善吉等転教即是領知．但為菩薩説自不行証．故無怖取．即是従方等経出摩訶般若．因是得識大士法門．滅破無知．譬従生蘇出熟蘇．是為第四時教也．復経少時．父知子意漸已通泰．臨欲終時．而命其子幷会親族．即自宣言．此実我子我実其父．今吾所有皆是子有．付以家業窮子歓喜．得未曽有．此領何義．即是般若之後次説法華．先以領知庫蔵諸物．後不須説但付業而已．譬前転教皆知法門．不須重演観法．直破草庵賜一大車」．ここで智顗は「譬前転教皆知法門．不須重演観法．直破草庵賜一大車」と顕一を述べ，「長者有疾」は思想的概念を主とし，患苦の状態に相当するものではない．『妙法蓮華経文句』（大正蔵 34，p.86c）．「従世尊爾時長者有疾下．第二委以家業．此領大品仏命転教般若熟蘇之教也」．『法華義疏』（大正蔵 34，

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

p.551c3).『妙法蓮華経玄賛』(大正蔵 34, p.772b).『天台四教義』(大正蔵 46, p.775a).
13) 大正蔵 9, p.17a.
14) 大正蔵 38, p.659c.
15) 大正蔵 14, p.545a.

〈キーワード〉 中国，天台，智顗，『摩訶止観』，中国医学

（駒澤大学非常勤講師，仏教学博士）

新刊紹介

平岡　聡　著

『法華経成立の新解釈　仏伝として法華経を読み解く』

B6 版・348 頁・本体価格 4,400 円
大蔵出版・2012 年 10 月

NII-Electronic Library Service